

Rogers の共感に関する Hoffman の role-taking の観点からの再検討

松下 姫歌・松尾 良和¹

(2007年10月4日受理)

Reexamination of Rogers' Concept of Empathy
from the Viewpoint of Hoffman's Concept of Role-taking

Himeka Matsushita and Yoshikazu Matsuo¹

Abstract. Rogers' concept of empathy is seen as one of the fundamental in almost all schools of psychotherapy. But to fully understand his concept, careful examination of his works is needed. As he often described his concept in abstract ways, and as he preferred to write about psychotherapeutic attitude, rather than concrete technique, there is much room for misreading. We reviewed the vicissitude of his concept of empathy through his major works, and then examined it from the viewpoint of Hoffman's concept of role-taking.

Key words: empathy, role-taking, self-focused, other-focused

キーワード：共感，役割取得，自己注視的，他者注視的

1. 問題と目的

1-1 Rogers の治療者側の3原則と共感

Rogers (1957) は、心理療法における治療的人格変化の必要十分条件を公式化、なかでも治療者側の態度に関するものとして、純粋性 (genuineness)、無条件の肯定的配慮 (unconditional positive regard)、共感 (empathy) の3つをあげている。岡村 (1999) も指摘するように、この3つは広く心理療法一般の基礎論ともいべきものである。なかでも、共感是他者とその内面から理解する方法であり、『学派』を問わず心理療法で強調される (小林, 2004a) 要件の1つと考えられている。

1-2 Rogers の共感の概念にまつわる問題

Rogers の共感の概念に関して、河合 (1970) は、共感を含めた治療者側の3原則は、満たすこと自体難しいものであるのに、その実践のための理論がないことを指摘している。つまり、Rogers の共感の概念に

ついでに記述は抽象的であるため、たとえ感覚的には理解したようなつもりになったとしても、それが果たして彼の言わんとすることに沿っているかどうかという問題が残る、その実践となるとさらに問題は大きくなる。この点に関し、小林 (2004b) は、Rogers 自身が表現しようとしたことと、読者が読みとったものが、必ずしも一致しない可能性があることを指摘し、Rogers の記述は自身の主観的体験を言語化しようとしたものであり、記述の性質を正しくとらえ、記述と対話していくことの必要性を説いている。つまり、Rogers の語りにも共感的に理解していく必要がある。

一方、実践のための理論を示さない、Rogers のこのような姿勢に関して、村瀬 (1984) は、Rogers が好んだ「The way to do is to be.」という言葉を取り上げ、次のように考察している。すなわち、それは、「為すの道は、即ち、存る道なり」、「如何になすべきかを突き止めると結局、如何に在るべきかに至る」という意味であり、態度といった「存る道」を突き詰めれば、それがどうすればよいのかといった「為すの道」につながるということである。このことを踏まえると、実践のための理論は含まれてなくとも、共感のあり方を

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

示したその記述のなかには、実践につながるものが含まれている、と考えることもできる。Rogersの共感の記述に還って、Rogersの語りに忠実に、その根底に含まれている意味を共感的に探っていくことで、少しでも「為すの道」に近づくことができるのではないかと考えられる。

1-3 本論の目的

本論の目的は、こうした問題意識を踏まえ、Rogersの共感の概念について、Rogersの記述に立ち返って再検討することである。

まず、数あるRogersの共感についての記述を書かれた順に追っていくことで、概念に含まれているRogersの観点の変遷を読みとり、考察したい。

さらに、Rogersの共感の理解をさらに深めるために、Hoffman(2000)のrole-takingの概念からの検討を試みる。Hoffmanのrole-takingは他者の内的世界に対する推しはかり方に関する概念であり、Rogersのいう共感を異なる角度からとらえているものと考えられる。このrole-takingの概念を通じて検討することで、Rogersの共感の概念の本質について、新しい観点を提供できると考えられる。

2. Rogersの共感

2-1 Rogersの共感の変遷について

Rogersが共感について述べた論文のうち、最もよく知られているものの一つが、1957年の『必要十分条件論文』と呼ばれる、“*The necessary and Sufficient condition*”であろう。この論文は心理療法における治療的人格変化の6つの必要十分条件を提出したものであり、Rogersの「数ある論文の中で最も有名で代表的な論文(諸富, 1997)」である。しかし、Rogersは共感について、それ以前・以後の論文でも論じており、時代による変遷も見られる。ここでは、これらのうち代表的なものを時代順に、各々概観・考察していきたい。

但し、Rogers(1957)は、実は2年後の1959年に発表された“*A theory of therapy, personality, and interpersonal relationship*”の一部分をさらに詳細に論じたものであり、Rogersの理論的展開としてはRogers(1959)→Rogers(1957)の順が正しい。この逆転現象は、Rogers(1959)がその公刊の3年前の1956年には完成し、既に謄写版刷りで若干配布されていた(Rogers, 1960)ことに起因していると思われる。この点を踏まえて、両者に関しては、発表年順ではなくこの理論展開の順に沿ってみていく。

2-2 “*Counseling & Psychotherapy*”

(Rogers, 1942)

2冊目の単著にあたり、非指示的療法の立場を明確にした比較的初期の著作である。この論文では、後の必要十分条件論文(Rogers, 1957)のように、共感を治療上の条件として明確に提出しているわけではなく、論文中には、まだ、empathy(共感)の語は用いられていない。しかし、クライアントの感情とその理解を重視することや、そのための‘sympathetic identification’(同感的同一化[訳:筆者])など、その萌芽が読みとれる。

Rogers(1942)は、適応困難の根底には認識されない感情的要因があるとし、クライアントの感情の解放(releasing expression)が重要であり、そのためには、感情への応答(response to feeling)と感情の明確化(clarifying feeling)が必要であるとしている。

この点に関し、Rogers(1942)は「カウンセラー自身の役割は鏡のようなものであると認識することである」と述べており、この態度を具体化する方法の一つが、感情の反射(reflection of feelings:感情の照り返し)である。彼は、その際にカウンセラー側に必要な姿勢について次のように述べている。

「感情が表現されるにつれ、カウンセラーが、その感情に適度に同感的な同一化(sympathetic identification)と是認を与え、また、批判や否認の応答を控えれば、クライアントは自ずと適応問題の解決を阻害している隠れた矛盾した感情をあらわにするだろう(Rogers, 1942)」

つまり、reflection of feelings(感情の反射:感情を照らし返すこと)におけるカウンセラーの仕事は、クライアントの表現する感情に対する是認であり、sympatheticな同一化を与えることである。sympatheticとは、感情の周波数が“一致”し“同調”・“同期”する(sym-)のような感覚であろうか。この段階での理論的アイデアとしては、「クライアントが隠れた感情に向き合い、クライアント自身が感情を見いだし、感情体験と一致することで、感情を解放していくには、セラピストが、クライアントから発される感情を“そのまま”なるべく歪めずに“一致”した形で“照らし返す”ことが重要である」ことといえる。したがって、まだこの段階では、周波数の“合わせ方”は問題とはされておらず、とにかく重要視されている眼目はsym-(同じ)であることであると言える。

2-3 “*Client-Centered Therapy*”

(Rogers, 1951)

3冊目のこの単著においても、まだ、empathyの用

語は用いられていないが、empathic understanding (共感的理解) という語が出現している。Rogersは、心理療法におけるカウンセラーの態度についての考察を深め、受容とともに、共感的に理解することという用語を用いて次のように定式化している。

「カウンセラーの役目とは、できるだけクライアントの内部的照合枠 (internal frame of reference) を身につけ (assume)、クライアントが見ているままの世界を認知し (perceive)、クライアントが自分がどのように見られているかというクライアント自身の気持ちを理解し (perceive)、そうしている間は外部的照合枠 (external frame of reference) に基づく一切の認知を排除し、クライアントにこの共感的な理解 (empathic understanding) を伝達する (Rogers, 1951)」

内容の大筋は、Rogers (1942) 同様、クライアント本人が見ているまま感じているまを歪めないようにクライアントに返す、ということではあるが、変化している点も複数ある。

まず「内部的照合枠 (internal frame of reference)」と「外部的照合枠 (external frame of reference)」の観点である。これらと共感についての関係はこの論文では詳述されておらず、後の1959年の論文で詳しく説明されている。

ここで、理解を少し先取って、59年の記述から説明を加えておくことにしたい。内部的照合枠は、その個人の主観的な世界であり「意識に入ってくる可能性のある感覚、知覚、意味、記憶などの全てが含まれている」(Rogers, 1959)。外部的照合枠については、「観察対象である人や物に共感することなく、たんに自分の主観的な内部的照合枠からのみ知覚することを、外部的照合枠から知覚するという」(Rogers, 1959) と定義されている。

つまり、Aという人自身の内的世界における見えや体験のあり方がAの内部的照合枠である。他者の内的世界における見えや体験のあり方 (すなわち他者の内部的照合枠) から見たAの体験は、外部的照合枠からの知覚ということである。単に自らの主観的な知覚の仕方のみで見るだけでは、Aの体験には必ずしも届かないのである。外部的照合枠から離れ、Aの内部的照合枠に近づくことが「共感」ということになる。

先にも述べたように、こうしたことについては51年の論文では論じられていない。しかし、この51年の時点で、内部的・外部的照合枠のアイディアが出てきたことそのものは、42年当時の sym-pathetic な同一化のアイディアからの大きな視点の変化と言える。つまり、自己でない他者の内的体験があるがままに“一致

して”体験するということが、いかにして成り立ちうるのか、という視点が含まれており、そこに自と他の心的過程の線引きをする意識が含まれたということである。

また、注目したいのは、相手の内的体験に近づくために、内部的照合枠を「身につける (assume)」と表現されていることである。この、assume という語には、語源的に、「仮に」という側面と「身につける」側面が含まれている。つまり、「仮」性は、自分の体験と相手の体験の間に線引きをして混同しない、という性質を意味し、「身につける」性質には、単に受動的に受け取るわけではない、敢えてそれを手に入れる方向に向かうという動的な姿勢が含まれているニュアンスがある。

したがって、内部的照合枠を身につけるとは、相手の内部的照合枠は、そもそも自分には備わっていないし、根本的には知り得ないものである、ということ的前提としているという姿勢が、「仮」なのであって、その前提の意識の上で、本来知り得ないものを「敢えて身につけよう」と入っていくことを意味するのではないかと考えられる。

それでも、そもそも相手の内部的照合枠は完全に自分のものにはならないはずのものであり、それに近づくとしても、もともと自分のもっている内部的照合枠、すなわち相手から見れば外部的照合枠が入り込んできそうなものである。この点について「そうしている間は外部的照合枠に基づく一切の認知を排除」することが条件づけられている。

このように、自他の線引きをする条件付きの意識で内部的照合枠に敢えて近づき、身につけようと試み、その状態の下で、クライアントの世界や感情を perceive する。語源的に見て perceive は完全に受け取る、ぱっと瞬間的に貫かれるようにわかりきるという意味合いであり、-ceive には、そこにあるもの・こちらに来るものを取るといった、どちらかという受動的なニュアンスがある。つまり、相手の内部的照合枠に敢えて入るところには、それは完全に相手のそれそのものではありえないという前提意識はしっかりと持つ必要があるが、それを前提にして入った中で見えてくる、感じられてくることそのものは、見えるまま感じるままに受け取るべし、ということだと考えられる。

このようにして相手の内部的照合枠とその内的体験に近づくようにすることが、empathic understanding、すなわち、em-pathic とは、あえて言うならば、感情的な波長の中に入っていく、感情の波長に自らなろうと敢えて入っていくというようなニュアンスであり、understanding は言外のものも含めて捉えたことと

いったニュアンスであると考えられる。

「クライアントとともに体験するということ、クライアントの態度を身をもって体験するということは、カウンセラーの同感的同一化 (sympathetic identification [筆者訳]) によるものではなく、むしろ共感に基づく同一化 (empathic identification) である… (略) …カウンセラーは共感の過程に没頭することを通してクライアントの憎悪、希望、恐怖を認知するのであって、カウンセラーとしての自分を排除して、そうした憎悪、希望、恐怖を体験するわけではない (Rogers, 1951)」

ここに示されているように、相手の体験と自分の体験や、相手の知覚と自分の知覚の区別を徹底的に意識するということは、「カウンセラーとしての自分を排除する」ということではないし、よく誤解されるように、「情動的に巻き込まれないように距離をとる」といった、心的関与を切り離したり遠ざけたりするような性質のものでは決してない。そうではなく、自分と相手とを混同しないという線引きの上で、カウンセラーとしての役割の下に、敢えて自分から相手の体験様式へと近づいていくという能動性が、empathic な姿勢の本質であり、相手の体験をあるがままに受け取ることに基づくための、装置の枠組みと言えよう。

また、Rogers (1951) は、個人の体験の特質についてふれる際、'sensory and visceral' な体験という表現を頻繁に用いている。従来「感官的・内臓的」という訳語があてられてきたが、村瀬 (2004) は、この2つの語には心理学および生理学的な意味があり、その二面性を踏まえて初めてロジャーズの言わんとすることが理解できるとしている。すなわち、「sensory にはより生理学的水準での『感官的』という意味と、より心理学的水準での『知覚的』の両者があり、visceral にも同じように、それぞれ『内臓的』という意味と『直感的』という意味があり、これら二つの水準が同一の言葉で表されているところに実は深い含蓄が認められる」としている。

この村瀬 (2004) の見解を踏まえると、この 'sensory and visceral' には、次のような意味がこめられていると考える。すなわち、よりはっきりとした感覚を伴った五感から感じられるような諸感覚 (生理学的水準での sensory) や、同じくはっきりと自分の中で認めたり感じたりすることができる気持ちや感情などの心理的感覚 (心理学的水準での sensory)、そして、漠然としていてなにかはっきりとはわからないけれど、なんとなくからだのなかに感じられる五感的感覚 (生理学的水準での visceral) や、同じく漠然としているけど、こころのなかにあることはなんとなく感じられて

いるような気持ちや感情などの心理的感覚 (心理学的水準での visceral) である。このように、Rogers の言う個人の体験とは、これら4つの要素を同時に含むような幅広い性質をもったものと考えられる。

したがって、empathic に共感する側が、他者の視点から感じたり理解したりすることが求められているのはそのような性質の体験であると考えられる。つまり、生理学的水準のもの心理学的水準のもの、はっきりと対象化可能なものから、その人自身ははっきりと対象化できていないものを含んでいるといえるだろう。

2-4 "A theory of therapy, personality, and interpersonal relationship" (Rogers, 1959)

Rogers の基本理論が体系的にまとめられ、構成概念の定義も明示された論文という意味で重要論文の1つといえる。セラピーの過程が起るための条件として、後の Rogers (1957) で展開される6つの必要十分条件についても示されている。この論文で初めて empathy の語が明確に定義されたと言えよう。

「共感 (empathy) とか、共感的 (empathic) であるという状態は、他人の内部的照合枠を正確に知覚する (perceive) ことであり、それに付着している情動的要素や意味をも知覚する (perceive) ことである。その際に、自分はあたかもその人であるかのようになるのだが、しかも決して“あたかも…のような”という条件 ("as if" condition) を失わない状態である。… (略) …もし、この“あたかも…のように”という性質がなくなるならば、それは同一化 (identification) の状態である (Rogers, 1959)」

この記述にある、内部的照合枠は、先に見たように相手の内的世界からの体験の見え方である。ここでは相手の内的世界やそこで意識されるもの、そして、それに付随する情動的要素や意味を知覚することを共感としている。

先に述べたように、Rogers (1951) での理解の対象には、特にこのような説明はなく、共感した相手の内的世界における 'sensory and visceral' なあらゆる体験という感じであったが、ここでは情動的要素や意味がとくにとりあげられ、個人的な要素がさらに強調されているように思われる。

加えて、51年の論文で検討した、自分の体験および体験主体に関する線引きの側面と、それがまるで自分が体験しているか錯覚するくらいに入っていくという側面が、「あたかも…のような”という条件 (as if condition)」という表現でさらに強調されていると考

えられる。加えて、この条件が失われてしまった場合のアプローチは「同一化」であって共感ではない、たいへん似て非なるものであることを強調している。

Rogers (1959) はさらに、共感認識の方法の1つであり、この他に内部的照合枠、外部的照合枠からの認識があるとしている。注目すべきは、この3つの関係であり、これらは1つの連続線上に並んでいるとされる。すなわち、自分の内部的照合枠における完全な主観性から、他のものについての完全な主観性（外部的照合枠）がそれぞれ両端にあり、「その中間に他者の主観的な世界を共感的に推しはかろうとする (inference) 領域が広がる (Rogers, 1959)」というものである。

他者の内的世界（その他者の内部的照合枠）はその個人だけのものであり、それとは別の内的世界（自分の内部的照合枠）をもつ者が、どんなに努力しても、完全に、正確に知覚する (perceive with accuracy) ことはできない。可能なのは、他者の体験の見え方に近づきながら共感的に推しはかるとなる (inference) ことなのであり、この推しはかるとなみをどのように遂行するかが問題になってくるものと考えられる。

2-5 “The necessary and sufficient condition” (Rogers, 1957)

上述の通り、Rogers (1959) を基に、心理療法における治療的人格変化の6つの必要十分条件を検討したものである。共感については次のように述べられている。

「クライアントの私的世界をそれが自分自身の世界であるかのように感じとり、しかも「あたかも…のような」という性質をけって失わない—これが共感なのであって、これこそセラピーの本質的なものであると思われる。クライアントの怒り、恐れ、混乱を、あたかも自分自身のものであるかのように感じ、しかもそのなかに自分自身の怒り、恐れ、混乱を巻き込ませていないということが、私たちが述べようとしている条件なのである (Rogers, 1957)」

この定義は、基となった59年の論文における定義とよく似ているが、一つには、より平易な表現になっている。例えば、59年では、「“as if” condition が失われてしまうと同一化になってしまう」、と表現されていたこと、つまり、自分の感情と相手の感情を混同して、自分の感情を相手のものとして持ち込んでしまうと、相手の感情を捉える視点を見失ってしまうという点が、「クライアントの怒り、恐れ、混乱を、あたかも自分自身のものであるかのように感じ、しかもそのなかに自分自身の怒り、恐れ、混乱を巻き込ませてい

ない」という表現になっている。

語用的には、クライアントの世界を感じ取ることに関して、Rogers (1951; 1959) では上述したように perceive が用いられているが、57年の定義では sense が用いられている。もっとも、51年には共感的理解の姿勢として sensory and visceral という面が強調されているので、論文全体としての根本的な姿勢は51年以降は共通しているものと考えられる。あえて言うならば、sense は語源的にはラテン語・フランス語系の言葉で、基本的に五感で感じることや、知覚すること、何らかの方向感覚を含んだ本能的感覚を指す。perceive の、そこに生じているものをぱっと捉えきるというヴィヴィッドな感覚よりは、senseの方が漠然とした感覚から強烈な感覚まで、感覚そのものの種類の幅も広く、生きる本能とも結びついた感覚であること、さらに、senseには意味という意が含まれるように、生きる方向性を束ねるアンテナ感覚のような面や、背後にある読みとるべきものに対する感覚も含まれており、より能動的な心的関わりを指す言葉のように思われる。

このような、共感のいとなみに際して働かせる感覚を指す言葉として sense が選ばれたということは、相手の体験に近づくための感覚の幅広さや奥深さを、より平易で趣深い用語を用いることで、これまで以上に明確にしたと言えるだろう。

2-6 “Empathic: an unappreciated way of being” (Rogers, 1975) における共感

この論文は、Rogers 本人が述べているように、共感についての再検討を行っているものである。まず、Rogers (1959) の共感の定義を、「状態」としての定義であると総括している。加えて、共感とは「状態」ではなく「過程 (process)」であるとし、「過程」としての定義として、次の諸契機を記述している (番号は筆者による)。

- ①「他者の私的な知覚的世界に入り込み (entering), そこですっかり居心地よく感じる (becoming at home) ことを意味する」
- ②「他者が体験しつつある、恐れ、怒り、やさしさ、困惑など、なにであろうとも、瞬間瞬間、この他者の内部を流れ、変化しつつある感じられる意味に敏感である (being sensitive) ことが含まれる」
- ③「一時的に他者の人生をともしする (living in his life) こと、判断することなく繊細に動き回る (moving about) こと、その他者がほとんど気づいていない意味を感じ取る (sensing) ことを意味する。しかし、その他者がまったく気づいていないよ

うな気持ちを伝えることは、あまりに脅威的であるので行なわない (not trying)」

- ④「ある個人が恐れている事柄を、自分の新鮮で恐れのない目で眺めたまま、その他者の世界で感じとったことを伝えていく (communicating) ことを含む」
- ⑤「自分が感じていることの正しさをその他者とともによく検討 (checking) し、自分の相手から受けとる反応によって案内されていく (being guided) ことを意味する。自分はその他者の内的世界における信頼できる同伴者である」
- ⑥「その他者の体験過程の流れに含まれる可能な意味を指摘することによって、その相手が体験過程というこの役立つ指標に焦点を当て、その意味を十分に体験し、その体験の中で前進するように助ける」
- ⑦「このように他者とともにあることは、偏見なしに他者の世界に入るためにも、しばらくの間、自分自身の視点や価値観を横に置くことを意味する。これは、たとえ他者の奇妙で見慣れない世界に入り込んでも混乱したりせず、望むなら自分の世界に気持ちよく戻ることのできる安定した者のみが行なえる」

これらの75年論文の記述全体に最も特徴的なのは、-ing 表現が多様されていることである。以前の記述では、一貫して動詞の原型もしくは不定詞で記述されていたのと比べ大きな変化である。この論文では Rogers は、共感を状態ではなく過程として定義するとしているが、共感過程は静的で状態的なものでなく、刻々と相互に動き続け、関与し続けている動きであると見ていることが、この -ing 表記に現れていると言える。

定義で示されている内容については、全体としては、1) 相手と自分のものの見え方やその主体は別であるという線引を意識的におこなうことが前提となること、2) そのことによって、相手の内部的照合枠に近づき、その枠の中に敢えて入って行って、あたかも自分が体験している如くに、相手の体験に近づくことが可能になること、3) それは、自分自身の視点や価値観を持ち込まないことを意味すること、といった、これまでの論文で述べられてきた、“as if” condition に含まれる3つのエッセンスについて語るものであることは変わらない。

一方で、この75年論文に特徴的なのは、Gendlin の体験過程 (experiencing) の視点に全体として大きな影響を受けていることである。Gendlin (1964) によれば、体験過程とは具体的、身体的な感情の過程 (process of concrete, bodily feeling) である。それは人の内部に存在する漠然とした不明瞭なものであるが、直接注意を向けることでその意味を感じるものが

可能となる。いわゆるフォーカシング (focusing) であるが、これは Rogers の言う「sensory and visceral」な体験をより対象化していったり、いまだ明らかになっていないそこに含まれる意味をくみ取る作業を行っているとも考えられる。⑥の記述は、相手のなかに存在する、このような体験過程の存在を指摘することで、その意味を感じ、体験することへの援助を示しているといえよう。

また、この体験過程の視点は、クライアントに対してのみならず、共感する主体側にも向けられていると考えられる。共感的に他者の内的世界からの視点を身につけたとき、主体の内部で体験されている体験過程や、そこに注意を向けることで感じられる意味は、その相手の内的世界に即したものであると推測される。しかし、それはあくまで相手とは異なる他者である、主体の側の中に生じた、主体自身のものであり、それをそのまま相手のものとして体験することは、主体の内的世界を相手のそれに巻き込ませることにつながりうる。そこで、④のように自分の感じたままを相手に伝え、⑤のように自分の体験を相手から受け取る様々な反応のフィードバックに導かれていくことで、より忠実に相手の内的世界に沿っていくとなりが続けられていく。ここで行われているのは、相手の内的世界の視点に立った自分が、それに即した「sensory and visceral」な体験をしながら、フォーカシングによってそこから意味を見出したり、体験を深めていくということであり、そして、その視点を相手の視点に照らしてのフィードバックで修正し続ける営みであると言える。換言すれば、ここには、自分の体験過程を相手の体験過程にチューニングしていく、共感のあり方が示されているといえるだろう。

2-7 Rogers の共感についての総括

(1) 「状態」としての定義と「過程」としての定義

Rogers の共感には、50年代までの論文における「状態」としての共感と、75年論文における「過程」としての共感の、大きくわけて2種類の定義が存在することがあげられる。

岡村 (1999) は、Rogers (1957) の治療者側の3条件 (純粋性、無条件の積極的関心、共感的理解) は、治療者がなすべき行為の規定 (prescription) ではなく、存在する事実についての記述 (description) であるとしている。1957年論文のアイディアの基本路線が示されている1951年論文について Rogers 自身「もっとも成功している心理療法における関係に起こっていることを説明する」ことを目的に定式化したと述べており、これを字面通りに受け取れば治療的人格変化の生じる

時の治療者側の関与姿勢と体験の特質という「状態」を示しているとも見ることできるかもしれない。1957年論文の基である1959年論文が、1975年論文で本人が「状態としての共感」と位置づけたのもこの意味であろう。

しかし、ここでstaticな記述とされるRogersの50年代の論文が示しているのは、「単にその時に起きている事実」というような受動的な内容なのであろうか。これまで見てきたように、Rogers自身が、心理療法に必要なカウンセラーの姿勢や理解の視点と、それがなぜ心理療法に結びつくのか、という彼の心理療法の根本理念を考えつづける過程が論文の記述に現れており、それを共感的に読みとることで、その一つ一つの用語に込められた、一見、看過されやすくなるような重要な視点をみいだすことができたと思われる。それらは、単なる事実の記述ではなく、心理療法を療法たらしめるエッセンスとしての心的関与のあり方を示すものであると考えられる。

その意味で、今回見てきた、Rogersの50年代までの論文は、「心理療法の理念とその大きな枠組み」を示すという意味でstaticなものではないだろうか。既に見てきたように、50年代の論文の主要な視点は、75年論文全体に通底していることから、そのことが言えよう。75年論文は、その理念をどのように瞬間瞬間に具体化していくことが心理療法たりえるのかを、プロセスとしてポイントを描き出したものと言えよう。

(2) Rogersの共感の概念における基本理念と課題

今回とりあげたRogersの共感の概念に関する主な記述に一貫してみられる基本理念について整理すると、次の2つの基本的側面を見出すことができよう。これらはRogersの共感の概念にとって欠かすことのできない必須の特徴であると言えるだろう。

- ①共感はより忠実に相手の内的世界や体験を理解するあり方であるということである。「あたかも…のごとく(as if)」という語を用いて示されていたように、共感とは自分の内的世界と相手の内的世界を混同してはならず、そのような態度によって、相手の内的世界のありように忠実に沿っていくことにつながるのである。他者の内的世界と自分の内的世界を混同して没入する同感的同一化は、共感にはつながらず、自らの体験を相手を見て、相手の体験に近づくことを妨げる可能性がある。
- ②共感クライエントの体験認識の方法の1つであり、他者の内的世界を推しはかるという方法に基礎を置くということである。これは1)で述べた条件があつて初めて成り立つことであるが、自と他を混同しない線を引くからこそ、敢えて自ら、相手の体

験に近づこうとして推しはかるという能動的な営みが生じるのである。そして、やはりこのプロセスにおいても、①の自他を混同せず、自分のものの感じ方の枠組みを外して関与することが必要となる。

この基本理念の大枠は50年代にほぼ形作られたが、75年論文では、これらに加え、Gendlinの体験過程の概念を包含している。つまり、相手の内的世界の視点を推しはかり、その世界にいる自分の体験過程を参照しながら、そこで感じられる意味をくみ取っていくこと、加えて、そこに自分の内的世界に基づく体験を巻き込ませないために、また、相手の体験過程への参照を助けるために、相手に自分の理解や感じたことを伝えることである。そして、それに対する反応をフィードバックとしながら、推しはかった相手の内的世界の視点をより相手のものに沿うよう修正していく。この一連の過程には、自分の体験過程の参照と推しはかった相手の内的世界の視点の修正という、自分の世界と他者の世界の往來の観点が含まれている。相手の内的世界の視点は想像的に推しはかることによるのみ獲得できること、また、その視点には常に自分の視点が混入する可能性があることを踏まえると、このような自他の世界の往來を通して、相手の内的世界の視点に自らを能動的にチューニングし続けていくあり方こそ、Rogersの言う共感の本質であると考えられる。

しかし、こうした、Rogersの共感の基本理念については課題もある。すなわち、相手の内的世界の視点、すなわち内部的照合枠を、いかにして推しはかり、近づいていくのか、という点である。これまで見てきたとおり、基本理念は、まさしくこのことについて、Rogersが考えてきたからこそ生じてきたものである。

けれども、やはり残される疑問がある。相手の内部的照合枠を、自分の内部的照合枠を外して推察するならば、そこに見えてくるのはいったい何なのであろうか。自分と相手を心的に混同しないよう区別した上で、相手の目線を推察して、その目で見えていくというポジションに入っていくための糸口はどこから得ているのだろうか。

この点について、Rogersの共感とは少し異なる角度から相手の内的体験を推察しようとする関与のあり方であるHoffman(2000)のrole-takingの概念をとりあげたい。

3. Hoffmanのrole-takingとRogersの共感

3-1 role-takingについて

role-takingは、想像的に他者の立場や状況に立つ

こと (Hoffman, 2000) であり、邦訳としては「役割取得」と訳されるのが一般的である。これは、Mead (1934) の役割理論からきていると思われるが、そこでの意味は、人が社会化の過程で他者や社会に期待される行動や態度を、それらの立場からの視点で見出し、身につけていくことを示したものである。一方で、共感における role-taking は、他者の内的世界を推しはかり、体験・理解するための方法であり、Mead の role-taking とは多少その目的が異なる。さらに、邦訳の「役割取得」という語からは、「役割」という具体的な態度や行動をとるという意味が感じられ、Hoffman のいわんとする概念とは少々ニュアンスのずれも感じられる。そこで誤解を避けるために本論では原語の role-taking を用いることにする。

role-taking の考え方は意外に古く、哲学の分野において、Smith (1759) が、強い情動を経験している他者の立場に想像的に立つことで自らにも同様の感情が生ずる sympathy という共感に近い概念を提唱している。近代に入ってから、Mead (1934) が、社会学の立場から、先述のように、人が社会化の過程で他者の視点から自分をみるということ論じている。また、Piaget (1964) は、子どもの自己中心性と脱中心化の観点から、子どもは心理的、物理的なものの方がもっぱら自分からの視点に基づくものから、次第に他者の視点にもとづくものも想像・認知できるようになるという発達の観点を示している。

共感の理論研究や実証研究において、role-taking は共感喚起メカニズムの主要なものとしても位置づけられている。そして、その代表的な研究の1つとしてあげられるのが、Hoffman (2000) である。

Rogers の共感とは、その相手の内部的照合枠を推しはかるといふ側面が、role-taking の想像的に他者の視点に立つという側面とはほぼ同じことであると考えられる。ただし、Rogers の共感においては、内部的照合枠はその人の主観的世界やそこからの見えであり、相手のそれに近づくには、自らの内部的照合枠を外さねばならないというところで具体的な手がかりが失われ、いきなり困難にぶつかる。role-taking においても、他者の視点は見えないものとして前提されているが、それを推察するために何を手がかりにしてどのように関与するかという概念である点が、共感の概念と異なる。したがって、2つの role-taking の観点は、共感の概念と照らしてみること、相手の内界の推察のあり方の質の違いとそこでおこなわれている推察に含まれている契機や推察の手がかりを検討しうる一つの視点となりうるのではないかと考えられる。

3-2 自己注視的、他者注視的 role-taking

Hoffman (2000) は、role-taking を単に想像的に他者の立場や視点に立つものとするのではなく、そこには性質の異なる2つのあり方が存在すると主張する。その1つ目が、自己注視的 (self-focused) と呼ばれる role-taking である。これは、想像的に立った相手の立場や状況で、自分が感じることをもとにして、その人の内的世界を推しはかるといふあり方である。たとえば、目前の怪我をしている人と話をしている、その人に「大丈夫」と言われても、もし自分が相手と同じ状況であればその痛みにきつと耐えられない、といたたまれなくなっているような場合はより自己注視的といえるだろう。このように、自己注視的な role-taking では、相手の状況を自分に引きつけて捉えるのが特徴である。そのため自分が体験しているかのような生々しい内的体験、強い感情的体験が可能となるが、一方で、自分の内的世界を相手に重ねて見ているので、そこで感じられるものは相手の体験というよりも、自分の体験が色濃く反映されている可能性がある。

Hoffman の主張する2つ目の role-taking は、他者注視的 (other-focused) と呼ばれるものである。これは、相手の感情や内的世界に直接注意を向けて推しはかるといふあり方を言う。たとえば、先の例でいえば、その相手の「大丈夫」という言葉や、軽やかな動作、怪我する前とかわらない様子や雰囲気などに注目でき、自分が同じ状況であれば耐え難いと感じたとしても、この人は平気であるとか、大したことはないと感じられるような場合、それはより他者注視的であるといえるだろう。このように他者注視的な role-taking では、相手の内的世界を見るのに際して、自分のそれを通して見ようとしなないところが特徴である。直接的には相手の言語的・非言語的な表示や、性格など相手やその立場・状況に関する情報が意味をもつが、それ以上に、自分と他者との間に巻き込まれない適度な距離を維持できること、相手の内的世界を推しはかっている間は自分の内的世界のことは脇に置いておけることが重要になってくる。

3-3 自己注視的・他者注視的 role-taking の関係

この2つの role-taking について、Hoffman (2000) は、両者は各々独自に働きうることを指摘している。すなわち、共感するなかで、それぞれお互いへの移行が可能であるということ、両者が同時並行的に働くことも可能であるということである。

この点を検討したのが松尾・松下 (2007) である。松尾・松下は、Hoffman (2000) のこの2つの role-taking の観点から尺度構成と因子構造の確認を試み

ている。その結果は、自己注視的、他者注視的role-takingが別々の因子として抽出された2因子構造であった。このことは、両者が正反対の態度として1次元軸上に位置づけられる構造ではなく、ある程度互いに両立しうるものであることを示していると言えるだろう。

したがって、両role-takingの働きがどのように組み合わせられているかによって、共感ないし他者の内界に対する推察のあり方の性質が異なってくるのが考えられる。

3-4 Hoffmanのrole-takingからみた共感

このHoffman(2000)の自己注視・他者注視の二つのrole-takingの働きによる他者の内界の推察のあり方とRogersにおける共感を、照らして検討してみたい。

- ①自己注視が高く・他者注視が低い場合は、自分の内部的照合枠からの推察であり、内的世界を相手に重ねて体験しやすいために、体験としては生々しく感じられるかもしれないが、それは相手にとっては外部的照合枠からの推察となるために、相手の体験に近づくことからは遠ざかってしまう可能性がある。これは、Rogersのいうところの同感的同一化の状態に近いと考えられ、彼の言う意味での共感にはあたらない。
- ②他者注視が高く・自己注視が低い場合は、自分の内的世界を相手に重ねることなく、相手に生じていることをさまざまに注意を向け知覚し感じ取ることで、相手の内的体験を推し量ろうとする。これは、Rogersの言う共感の、「自らの内部的照合枠からではなく」相手の内部的照合枠を推察していくことに含まれる、自と他を混同しない推し量り方のひとつと言えるのではないだろうか。
- ③両者がともに高い場合は、自分の内部的照合枠からの推察と、自分の内部的照合枠を外して相手の内部的照合枠を推察する動きとを、重ねて発動しうると考えられる。その場合、たとえ相手が自分と似た体験をしていると感じられる場合でも、混同してしまうのではなく、自分の体験と相手の体験を分けて推察していくことが可能になるため、両者の性質の違いを見いだしうると考えられる。

この③のような推察のあり方とRogersの共感のあり方を照らしてみると、Rogers(1957)が「『あたかも…のような』性質をけって失わない」という表現で示した体験の推察の姿勢には、まず、相手の内的世界に自分のそれを混同しない共感のあり方としての他者注視の側面が必要と考えられる。しかし、それだけでは、相手の中で動いている体験様式は見えにくい面

もあるだろう。“as if” conditionに含まれている、もう一つの側面、まるで自分が相手の体験様式を身につけて体験しているような、自分を敢えて投入する契機としては、幾ばくかの自己注視的側面も必要なのではないだろうか。もちろん、自己注視的側面は、自己の内部的照合枠であり相手にとっては外部的照合枠であるから、そのままではずれている可能性がある。しかし、他者注視的な、自らの内部的照合枠を解除して相手の状態を直接知覚感覚していく視点を前提としながら、そのような相手の身になるという相手の内部的照合枠に近づく時に、少し自己注視的側面も働かせているのではないだろうか。そして、そこに紛れている自己注視的側面、すなわち外部的照合枠の側面が、相手との関与の中で少しずつ削ぎ落とされるよう修正に導かれ、徐々に相手の内部的照合枠とのズレが調整されていくのではないかと考えられる。

このようにしてRogers(1975)が体験過程の視点から示したような、自分と相手の世界の自由な往来の可能性をもつ性質の共感のあり方に近づくのではないだろうか。

4. 結語および今後の課題

本研究では、Rogersの共感の概念について詳細な再検討を通して、Rogersの共感および心理療法の中核的な基本理念を整理した。加えて、その基本理念の課題点に関し、Hoffmanのrole-takingの観点から検討し、Rogersの共感に含まれる契機についての新たな手がかりを提示した。

今後の課題としては、Rogersの基本理念における、相手の内部的照合枠に関するアプローチをいかにして進めうるかについてのさらなる検討と、empathic understandingを相手に伝えること、およびその確認にまつわる課題、それらの営みが心理療法の動き全体の中でどのような契機と機能を生みだし、動的な構造を作り出すかについての検討があげられる。

【引用文献】

- Gendlin, E. T. (1964). A theory of personality change.
 Worchel, P. & Burne, D. (Eds.) *Personality Change*.
 New York: John Wiley & Sons. (村瀬孝雄訳 (1966) :
 人格変化の一理論。体験過程と心理療法。牧書店)
 Hoffman, M. L. (2000). *Empathy and Moral Development*. (菊池章夫・二宮克己訳 (2001) : 共感と道徳性の発達心理学。鳥書店。)
 河合隼雄(1970). 日本における心理療法の発展とロー

- ジャズ理論の意義. 教育と医学, 18(1), 11-16.
- 小林孝雄 (2004a). 認知心理学からみたクライアント中心療法—「共感的理解」という「理解のあり方」の検討. 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 ころの科学セレクション ロジャーズ—クライアント中心療法の現在. 日本評論社.
- 小林孝雄 (2004b). 「状態」としての共感的理解の定義を再検討する—ロジャーズの記述の比較検討—. 人間科学研究 文科大学人間科学部, 26, 67-75.
- 松尾良和・松下姫歌 (2007). Hoffman の role-taking の観点からの共感尺度作成の試み. 日本青年心理学会第15回大会発表論文集, 64-66.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, Self and Society*. (稲葉三千男・中野収・滝沢正樹訳 (1973): 現代社会学体系10 精神・自我・社会. 青木書店.)
- 諸富祥彦 (1997). カール・ロジャーズ入門—自分が“自分”になるということ. コスモ・ライブラリー.
- 村瀬孝雄 (1984). いかになすべきか, いかになすべきか—ロジャーズの人間観について. 村瀬孝雄・野村東郎・山本和郎編 心理臨床の探求—ロジャーズからの出立. 有斐閣.
- 村瀬孝雄 (2004). フォーカシングから見た来談者中心療法. 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 ころの科学セレクション ロジャーズ—クライアント中心療法の現在. 日本評論社.
- 岡村達也 (1999). カウンセリングの条件 純粋性・受容・共感をめぐって. 垣内出版.
- Piaget, J. (1964). *Six études de psychologie*. (滝沢武久訳 (1968). 思考の心理学—発達心理学の6研究. みすず書房.)
- Rogers, C. R. (1942). *Counseling and Psychotherapy: Newer Concepts in Practice*. Boston: Houghton Mifflin. (保坂亨・諸富祥彦・末武康弘共訳 (2005). ロジャーズ主用著作集1 カウンセリングと心理療法 実践のための新しい概念. 岩崎学術出版社.)
- Rogers, C. R. (1951). *Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications, and Theory*. Boston: Houghton Mifflin. (保坂亨・諸富祥彦・末武康弘共訳 (2005). ロジャーズ主用著作集2 クライアント中心療法. 岩崎学術出版社.)
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient condition of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103. (伊東博編訳 (2001). セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件. ロジャーズ選集 (上). 岩崎学術出版社.)
- Rogers, C. R. (1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relationship, as developed in the client-centered framework. Koch, S.(Ed.), *Psychology: A Study of Science III. Formulation of the Person and the Social Context*. New York: McGraw-Hill, pp.184-256. (伊東博編訳 (1967). クライアント中心療法の立場から発展したセラピー, パースナリティおよび対人関係の理論. ロジャーズ全集第8巻 パースナリティ理論. 岩崎学術出版社.)
- Rogers, C. R. (1960). Significant trends in the client-centered orientation. Brower, D. & Abt, L. E.(Eds.) *Progress in Clinical Psychology IV*. New York: Grune & Stratton. (伊東博編訳 (1967). クライアント中心的立場の特徴. ロジャーズ全集第15巻 クライアント中心療法の最近の発展. 岩崎学術出版社.)
- Rogers, C. R. (1975). Empathic: an unappreciated way of being. *The Counseling Psychologist*, 5(2), 2-10. (畠瀬直子監訳 (1984). 共感—実存を外側から眺めない係わり方—. 人間の尊重の心理学 わが人生と思想を語る. 創元社.)
- Smith, A. (1759). *The Theory of Moral Sentiments*. (水田洋訳 (1973). 道徳感情論. 筑摩書房.)